20　「物語」─中世の軍記物語

21年度　神戸女学院大学

★　次の文章は、「」と三人の幼い子どもたちの道行きの場面である。読んで、後の設問に答えよ。

　ならはぬ旅のに、野路も山路もみえ分かず。は二月十日なり。余寒なほはげしくて、雪はひまなくにけり。

　今若殿をさきにたて、殿の手を、牛若殿を懐にいだき、二人のをさあい人々には物もはかせず、氷の上をはだしにてぞ歩ませける。「や、つめたや、ａ母御前」とてなきかなしめば、をばをさあい人々にうちきせて、嵐き方にて、ははげしきかたにたち、はぐくみけるぞⅠなる。小袖をときて足をつつむとて、常葉いひけるは、「今すこして、棟門たる所あり。は敵清盛の家なり。声をしてなくならば、とらはれてうしなはれんず。命惜しくはなくべからず」といひふくめてぞあゆませ（ ⅰ けり ）。棟門立たる所をみて、今若殿、「是か。敵の門か」ととへば、なくなく「それなり」とうちうなづく。「さては乙若殿もべからず。我も泣まじきぞ」といひながらけるに、小袖にて足はつつみたれども、氷の上なれば程なくきれて、跡は血にそめて、顔は涙にあらひかね、とかうしてⅡ伏見の叔母を尋ねてにけり。

　は源氏の大将軍殿のとて、一門ののア上﨟にしてもてなしき。ましておのづからきたりしをば、世になき事のやうに思ひしに、今はｂの人のなれば、「いかがあらんずらん」とて、叔母はありしかども、なきよしをぞこたへける。「さりともぬ事はあらじ」とて、日のるまでつくづくと居たれども、こととふものもなかりければ、をさあい人々して、常葉泣々そこをにけり。

　寺々の鐘の、今日もぬとうちしられて、人をとがむる里の犬、声すむ程に夜はなりぬ。人の跡は雪にれて、とふべき戸ざしもなかりけり。

　ある小屋に立よりて、「宿、申さん」といへば、あるじの男出て見て、「夜ふけて、をさあい人々引具してまよはせ給ふは、謀叛の人の妻子にてぞましますらん。まじ」とて、男、内へ入にけり。る涙も雪も、左右のに所せく、柴のに顔をあて、しぼりかねてぞ立たりける。あるじの女出て見ていひけるは、「かひがひしき身ならねば、謀叛の人に同意したりとて、とがめなどはよもあらじ。Ａ高きもいやしきも女はひとつ身なり。せ給へ」とて、常葉を内へて、さまざまにもてなしければ、人心地にぞにける。

　二人のをさあい人を左右におき、一人懐にいだきてくどきけるは、「あはれ、いとけなきかな。母なれば、我こそたすけ（ ⅱ ん ）と思ふとも、Ｂ敵とり出しなば、をやかくべき。おとなしければ、今若殿をばきるか、乙若殿をばさしころすか。無下にをさなければ、牛若殿をば水にいるるか、土にこそれんずらめ。時、我いかにせん」と、夜もすがらかなしみけり。、、も習はぬ、伏見の里に、きくにつけてもかなしきに、Ⅲ宇治の河瀬の水車、何と浮世をめぐるらん。

　夜もければ、常葉そこを出んとす。あるじの男、をさあい人々をいとほしく思ひ奉り、「けふ、イ公達の御足をもやすめせ給へ」とてとどめければ、其日もそれにとどまりて、三日と申せば出にけり。あるじの男、馬こしらへて、常葉をのせ、をさあい人々を下人どもに守らせなどして、おのれも供して木津まで送りて帰りければ、「Ｃ世にあるときかば尋ねよ。我も忘るまじきぞ」とて、小袖とらせければ、「いかでかたまはり候べき。公達の御足をもつつみまゐらせ給へ」と申せば、「あるじのかたへ形見におくるぞ。謀叛の者の妻子にてあるが、人を尋て忍ぶなり。跡より尋ぬる者ありとも、しらすべからず」といひふくめてぞかへしける。

（注）　をさあい……「をさなき」の転じたもの。幼少である。

棟門……屋根を家の棟のように造った門。

松木柱、竹簀垣……松の木で造った柱、竹で編んだ家の外壁。粗末な家を表す表現。

問１　点線部ア「上﨟」・イ「公達」の漢字の読みを現代仮名遣いで書け。

　　ア＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

　　イ＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

問２　太線部「二月」の陰暦の月の古名を平仮名で書け。

　　［　　　　　　　　　　　　　　　］

問３　二重傍線部ａ「母御前」・ｂ「謀叛の人」は誰のことか。最も適当なものを、次の中から、それぞれ選べ（同じものを何回用いてもよい）。

①　今若殿　　　②　清盛　　　　　　　③　伏見の叔母

④　左馬頭殿　　⑤　左馬頭殿の北方　　⑥　あるじの男

⑦　あるじの女

ａ＝〔　　　〕　　ｂ＝〔　　　〕

問４　傍線部Ⅰ「哀なる」とあるが、この場面の具体的な状況として不適当なものを、次の中から一つ選べ。

①　母御前は幼子らに衣を着せ、風が穏やかな側に立たせた。

②　春とは名ばかりで、厳しい寒さの中の道行きであった。

③　幼子のうち先頭の今若殿だけがはだしで歩いていた。

④　旅慣れない上に朝の出発で進むべき道もわからなかった。

⑤　母御前は我が身を強風にさらし、幼子らを寒さから守った。

問５　（ ⅰ けり ）・（ ⅱ ん ）の助動詞について、本文中で用いるべき活用形として最も適当なものを、次の中から、それぞれ選べ（同じものを何回用いてもよい）。

①　未然形　　②　連用形　　③　終止形

④　連体形　　⑤　已然形　　⑥　命令形

ⅰ＝〔　　　〕　　ⅱ＝〔　　　〕

◎問６　傍線部Ⅱ「伏見の叔母」のふるまいの説明として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

①　現在の一行の立場にとまどいながらも居留守を使ったが、かに家の者に様子をうかがわせていた。

②　一行が予告なくやってきたので突然災いがふりかかったように感じ、どうしてこのような目に遭うのかとした。

③　の出来事にかかわる一行の訪問に驚き、自分を頼ってきたことをに思いつつももてなしを断わった。

④　以前のもてなしようとはうって変わって留守を装い、待ち続ける一行に対して、家の者が声をかけることさえなかった。

⑤　かつての華やかな出迎えとは異なり、こっそりと一行を休ませ、これ以上のもてなしはできないことを伝えた。

問７　波線部Ａ～Ｃの解釈として最も適当なものを、次の各群の中から、それぞれ選べ。

　Ａ　高きもいやしきも女はひとつ身なり

①　相手ののほどがどうであれ、対する女性の立場は変わらないものだ

②　身分がどのように変化しても、独り身で生きぬく決意をした女性には共通するところがある

③　子の身分の上下がどのようになろうと、母親であることには変わりはない

④　没落した身になっても、女性であるあなた自身に変化があったわけではない

⑤　身分の高低にかかわらず、女性という立場はみな同じだ

　Ｂ　敵とり出しなば、情をやかくべき

①　敵が子らを見つけ出したなら、助けようとするだろうか、いやするまい

②　敵が子らを見つけ出すその時、私は命乞いをするに違いない

③　敵が私を引き出すその時は、子らのことは助けるだろうか、いや助けるまい

④　敵が子らを見つけ出したなら、きっと助けてくれるに違いない

⑤　敵が私に目をつけたなら、母だからといって特別扱いをするだろうか、いやするまい

　Ｃ　世にあるときかば尋ねよ

①　敵がこのまま権勢を誇るときは私を訪ねておくれ

②　私がこの世に生きていると聞くなら訪ねなさい

③　夫が生きているを聞いたので尋ねるのだ

④　あなたが無事にいることを耳にしたら訪ねよう

⑤　子らが生きていると聞くなら訪問してやっておくれ

◎問８　傍線部Ⅲ「宇治の河瀬の水車、何と浮世をめぐるらん」は和歌的な修辞が用いられた表現である。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

①　宇治川の霧の中にほのかに浮かびあがる水車の景から、寄る辺なく放浪するさまを連想している。

②　河瀬の速い流れに勢いよく回る水車の様子から、逆境にあっても力強く生きるさまを表現している。

③　「宇治の河瀬の水車」は「浮世」を導く序詞として機能し、韻律のある一文となっている。

④　宇治川の急流とみに浮く泡とが対比的に想起される表現で、この世が無常であることを印象づけている。

⑤　「めぐる」は「水車」の縁語で、いこの世を生き巡るさまを宇治の水車が回り続ける様子になぞらえて表現している。

問９　文中の「牛若殿」は源義経のことを指す。義経のかかわる文学作品について述べた次の文章の空欄（　ア　）・（　イ　）に入れるのに最も適当なものを、次の中から、それぞれ選べ。

　義経が登場する作品は、『平治物語』『義経記』以外にも多くある。たとえば、室町時代から江戸初期にかけて作られた物語草子である（　ア　）のうち武家物には、「判官物」が圧倒的に多く、また俊寛のエピソードで知られる（　イ　）作の浄瑠璃『平家女護島』にも家の再興に関与する牛若の姿が描かれる。

①　黄表紙本　　②　読本　　　　③　御伽草子

④　上田秋成　　⑤　松尾芭蕉　　⑥　近松門左衛門

ア＝〔　　　〕　　イ＝〔　　　〕

【解答】

問１　ア＝じょうろう　イ＝きんだち

問２　きさらぎ

問３　ａ＝⑤　ｂ＝④

問４　③

問５　ⅰ＝④　ⅱ＝⑤

問６　④

問７　Ａ＝⑤　Ｂ＝①　Ｃ＝②

問８　⑤

問９　ア＝③　イ＝⑥

【現代語訳】

　慣れない旅の朝立ちに、野の路（なのか）山の路（なのか）も（涙で）見分けがつかない。時節は二月十日である。（春とは言っても）余寒はやはり厳しくて、雪は止む間もなく降っていた。

　今若殿を先頭に立て、（常葉は）乙若殿の手を引き、牛若殿を懐に抱いて、二人の幼い子供には履物も履かせず、氷（の張ったように冷たい道）の上を裸足で歩かせた。「寒いよ、冷たいよ、母さま」と言って（子供たちが）泣いて悲しむと、（常葉は）衣を幼い子供たちに着せかけて、激しい風の（あたりが）弱い側に（子供を）立たせて、自分は風の強い側に立って、子供を大事に守った様子は哀切である。小袖を解いて脚を包もうとして、常葉が言ったことには、「もう少し行って、棟門の立っている屋敷がある。これは敵の清盛の屋敷だ。（お前たちが）声を出して泣くならば、捕らえられて（命が）失われるだろう。命が惜しければ泣いてはいけない」と言い含めて歩かせた。棟門の立っている家を見て、今若殿が、「これですか。（これが）敵の門か」と聞くので、（常葉は）泣きながら「そうだ」とうなずく。「さあ、乙若殿も泣いてはいけない。私も泣くまいよ」と言いながら歩いたが、小袖で脚は包んだけれど、氷の上なのですぐに切れて、（彼らが）通り過ぎる跡を血に染めて、顔は涙を拭いきることもできず、とかくするうちに伏見の叔母を訪れて（屋敷に）入った。

　（叔母は、常葉のことを）ふだんは源氏の大将軍左馬頭殿の奥方として、一門の中でも身分の高い女性として応対していた。まして（今までは）たまに来訪したことを、この上ない名誉のように思っていたが、今は謀反人の妻子であるので、「どうしたらよいだろうか」と、叔母は思案したが、（結局、居留守を使い）いない旨を答えた。（常葉は）「それにしても帰って来ないことはないだろう」と思って、日が暮れるまでじっと座って待っていたが、声をかける者もいなかったので、幼い子供たちを連れて、常葉は泣く泣くその屋敷を出た。

　寺々の鐘の音で、今日も（日が）暮れたと自然とわかって、（見知らぬ）人をとがめ（て吠え）る里の犬の、鳴き声が澄み渡るほどに夜は深まった。人の足跡は雪に埋もれて、訪ねることのできる家もなかった。

　ある小家に立ち寄って、「（一夜の）宿を、お借りしたい」と（常葉が）頼むと、あるじの男が出て（常葉たちを）見て、「今も今、夜がふけて、幼い子供たちを連れて（路頭に）迷っていらっしゃるのは、謀反人の妻子でいらっしゃるのだろう。（願いを）叶えることはできない」と言って、男は、中に入ってしまった。（常葉は）落ちる涙も降る雪も、左右の袂にぐっしょりたまり、柴の編戸に顔を当て、（袂を）絞ることもできないまま立ちつくしていた。あるじの女が出てきて（常葉たちを）見て言ったことには、「自分たちはしっかりとした身分ではないので、謀反人に同情し（て世話をし）たからといって、とがめられることなどはまさかあるまい。身分の高低にかかわらず女性という立場はみな同じだ。お入りなさい」と言って、常葉を中へ入れて、あれこれ世話したので、（常葉たちは）やっと生きかえった気持ちになった。

　（常葉は）二人の幼い子たちを両脇において、もう一人を懐に抱いて（胸のうちを）訴えて言ったことには、「ああ、あどけない有り様よ。（自分は）母だから、ほかでもない自分が（この子らを）助けようと思っても、敵が（子らを）見つけ出したなら、助けようとするだろうか、いやするまい。少し年上なので、今若殿は斬るか、乙若殿は刺し殺すか。（一方）むやみに幼いので、牛若殿は水に入れるか、土に埋められ（ていずれにしても殺され）るだろう。そのとき、私はどうしたらいいのだろうか」と、夜通し泣き悲しんだ。松の木の柱、竹の簀の子（の床）、敷い（て寝）たこともない菅筵（のような粗末な調度しかない仮の宿で）、伏見の里に鳴く鶉（の鳴き声）は、聞くにつけても悲しいが、宇治の川瀬の水車（ではないが）、どうしてつらいこの世をめぐっているのだろうか。

　夜も明けたので、常葉はその家を出ようとする。あるじの男は、幼い子供たちを気の毒だと思い申し上げ、「（せめて）今日だけは、お子さんたちのお足を休めてさし上げなさい」と言ってひき留めたので、その日もそこに泊まって、（さすがに）三日目ということになりますので出発した。あるじの男は、馬や鞍を準備して、常葉を乗せ、幼い子供たちを下人たちに守らせなどして、自分も供をして木津まで送ってから帰ったので、（その別れ際に常葉は）「（私が）この世に生きていると聞くなら訪ねなさい。私も（この好意は）忘れるまいよ」と言って、小袖を一重与えたところ、（あるじの男は）「どうしていただくことができましょうか、いやできません。お子さんたちの足を包んでさし上げてください」と申すので、（常葉は）「あるじさんへ形見として贈るのだよ。（我々は）謀反人の妻子であるが、人を訪ねてこっそりと行動をしているのだ。後から探しに来る者がいても、教えてはいけない」と言い含めて（あるじの男を）帰した。